

# 健康に関する認識の画像化：自覚症状を例に

——医療の場面で認識を描き自己表現と対話を支援する試み

守山正樹／長崎大学医学部衛生学教室

キーワード：認識の画像化，自覚症状，受療コミュニケーション

略画，イラスト，漫画のように，“人が描いた画像”による情報の表現はつい最近まで社会的にインフォーマルなものとしてきた。しかし，いまこの分野に変化が起こりつつある。専門的な医学論文誌に略画などが登場することはまだまれであるが，医学・医療の専門家を対象とした雑誌でも記事を中心に啓蒙的色彩の強いもの場合は多くの略画・漫画的表現が使用され，医学書に漫画を取り入れた例も現れはじめています。

このようなタイプの画像化は従来なら文字で表記されてきた認識や思考の内容を，人が描くことで，よりわかりやすく親しみやすく表現しはじめていると考えられる。もしこの画像化が文字による情報の表現とコミュニケーションを補助し，部分的にせよ文字に変わるものになりうるのであれば，画像化に関する本格的な研究が必要となろう。しかし，これまでのところ，画を描いたのがプロのイラストレーターであっても医療従事者自身であっても，表に現れているのはすでに完成した作品だけである。“描くことによる認識の画像化”の過程については知見に乏しい。

そこで，著者らは研究テーマとして，だれでもが認識できるはずの健康状態を選び，なかでも自覚症状に着目して数年前から認識画像化の研究を進めている。研究開始時点では以下のようなことが問題となった。Q1. そもそも自覚症状を可視・画像化する（描く）ことは可能か。Q2. (1が可能であるとして) 描かれる画は一般的にどのようなものになるのか，人によってさまざまなのか，それとも共通点があるのか。Q3. 画像化の過程を支援できるか。Q4. 描くことは文字と同様に社会的に認められる表現手段となりうるか。

A. Silhouette	
B. Position of hand	
C. Facial expression	
D. Environment & situation	
E. Time, quantity & direction	

図1 自覚症状認識の可視化を支援する画像要素

以下に現在進行中の2つの研究について述べる。

## ■著者自身による画の開発過程への参加と，その経験からの一般化

“聴覚障害者が医療機関受診時に体験する医師との間のコミュニケーションの阻害”という具体的な状況から出発し，問題解決の手段として画を指し示すだけで行える問診法の開発を企画し，自覚症状の略画化を進めた。描くことに関心を示した少数の学生と著者らが，“・自由連想で描く，・できた画を他者に見せ，解釈してもらう，・結果をもとに画を改良する”という試行錯誤の過程を繰り返すことで，実際に26種類ほどの自覚症状が画

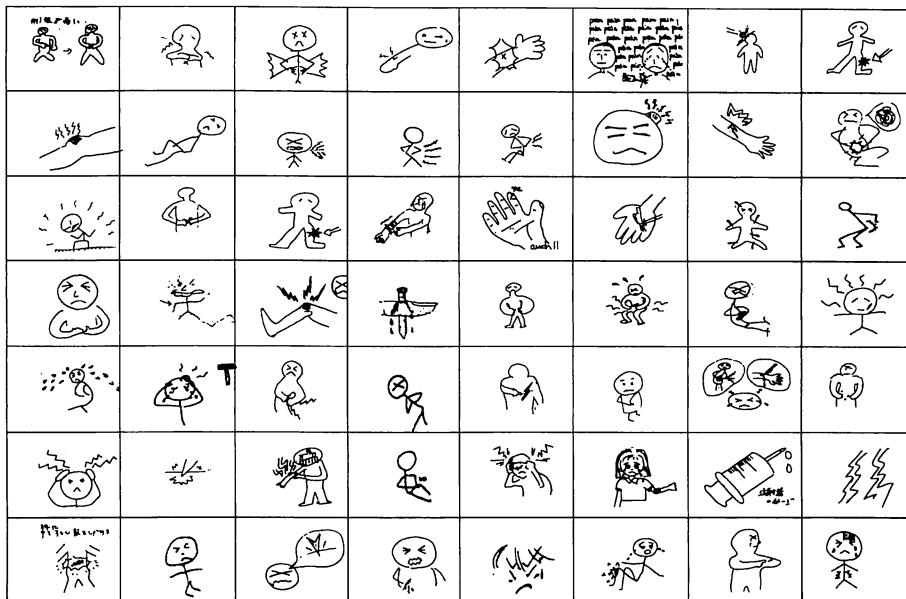


図2 56人の医学部4年次学生が描いた“痛い”

像化され、うち半数ほどの画はそれををはじめてみた人にも容易に理解されることが示された<sup>1,2)</sup>。試行錯誤過程で得られたさまざまな視覚的表現の要素をまとめ、画像化を支援するものとして図1を試作した<sup>3)</sup>。

■集団での略画の収集と解析、そこからの共通要素の抽出

画の上手な人だけでなく、一般の人びとも自己の自覚症状に関する認識をある程度画像化できるのなら、それらを出発点としてより広範に集団を対象とした画像化の研究を行うことができる。数年前から長崎で学生らに自己の自覚症状認識を画像化させはじめた結果、一般的な自覚症状であれば80%、あるいはそれ以上の学生が認識内容を白紙に描けることが明らかになった(図2)。さまざまな集団を対象に、この白紙法で特定の自覚症状の認識を略画として表出させ、その収集・分類作業を続けていると画像化に必須の情報がみえてくる。作業をさらに多数の自覚症状について進め、共通点を探っていくと、図1のような整理ができそうであるが、ほぼ同様のものに行き着くかは現時点ではまだ明らかでない。

これまで専門家の価値観が優先し、文字が情報表現の中心だった医学の世界に、情報のわかりや

すさ、親しみやすさというあらたな価値観を持ち込み、それを達成する手段のひとつとして“人が描く画像”を持ち込むことの是非は今後さらに議論されるべきであろう。上記の研究と関連して略画や漫画による問診表を試作・試行した著者らの経験からいえば、年配の世代では略画や漫画に拒絶的な反応を示す傾向が強いが、若い世代では医師も患者も1/4から半数近くがそれを好むことが示唆される<sup>4)</sup>。略画や漫画を好む学生らに聞き取りを行ってみると、視覚的なイメージを操作して物を考えていると思われる学生が少なからずいる事実にも気づかされる。これまでの医学・医療に関する重要な情報は専門家の手に握られていたが、人と人との間の相互理解・コミュニケーションの手段としての認識画像化の研究にあたっては、専門家の側が患者や学生も含む一般の人びとも持っている視覚的なイメージに学ぶことが研究の出発点となろう。

- 1) 守山正樹・他：電子情報通信学会技術研究報告. 91(185)：83-90, 1991.
- 2) Moriyama, M. et al. : *Tohoku J. Exp. Med.* 174 : 387-398, 1994.
- 3) 守山正樹・他：日本衛生学雑誌. 49 : 406, 1994.
- 4) 守山正樹：文部省科学研究費補助金研究成果報告書. 1995, pp.69-80.